「倫理的な生き方」を提唱するピーター・シンガーの死生観

山本 栄美子

1．はじめに

英米圏発のバイオエシックスにおいて、自文化的価値観が大いに反映されていたことが暴露されて以降、生命倫理の分野で今さら「普遍的で中立的な倫理」が標榜されたとしても、もはや懐疑的にならざるをえない。思想において語られる、抽象的な「普遍性」と名づけられるものの背後にある歴史性・文化性を見ることが求められているのが現代といえよう。なかでも、現代的な死生観を表す領域としての生命倫理の問題群について、自己の立場を堂々と表明し、何らかの提言ができるということは、その考察対象たる人間・生命あるいは環境に対して価値評価する独自の基準を有していることの反映と見なすことができる。本論文の考察対象とするピーター・シンガーは、応用倫理学[1]の分野において、まさにパイオニア的な存在として、自己の見解を積極的に提言してきた人物である。

シンガーは、2006年6月に、21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」が招聘し、講演会を開催した倫理学者であり、実践的に多くの人の人生を変えたという点で現代の最も影響力のある哲学者であるとも評されている[2]。彼は、自身の専門分野たる哲学・倫理学の領域にとどまることなく、政治・経済・医療・環境・国際援助・社会生物学といった幅広い領域に関心を寄せて、独自の哲学的解答を提示してきており、特に、

著書である『動物の解放』および『実践の倫理』は、応用倫理学における古典的地位を確立している。また、現在までに、大学の教授職と並行して、国際生命倫理学会の初代会長、大型類人猿プロジェクトの会長、動物保護団体「アニマルライト・インターナショナル」会長等も歴任してきた。

シンガーの理論はこれまで主に、動物解放や菜食主義、パーソン論、選好功利主義に焦点を当てた観点から論じられてきたが、それぞれが個別的に取り上げられてきた傾向がある。しかし、分野別に扱う限りでは、シンガーがなぜ幅広い分野を対象として倫理を考察しようとしているのかといった意図は見えてこない。彼のこれまでの著作を総体的に追っていくと、彼がもつ世界に対する幅広い関心の根底には、「世界における苦しみの軽減」をめざす目的意識があることがわかる。

本論文では、彼の積極的な活動が「世界からの苦しみの軽減」という命題遂行の取り組みであることを論じるとともに、1993 年の著書 "*How are we to live? : Ethics in an age of self-interest*"（邦訳『私たちはどう生きるべきか』）に注目して、シンガーの理性中心的な価値判断や死生観が核となって提唱される「倫理的な生き方」とは何かについて、感情や関係性の視点、さらには、人間にとっての「苦しみ」の意味づけと救済についても視野に入れて考察することを目的とする。

2.「倫理的な生き方」を提唱する戦略

シンガーは、『私たちはどう生きるべきか』[3]の冒頭において、次のように呼びかける。

> 「このために生きる」といえるものがまだ何かあるだろうか。金銭や、恋愛や、自分の家族の世話は別として、他に何か追求するに値するものはあるだろうか。もしあるとしたら、それは何だろうか。「このために生きる」などという話にはかすかに宗教的な香りがする。しかし、全然宗教的でない人でも、自分の人生に一つの意義――今の人生に欠けて

いるような意義――を与えてくれる基本的な何かを自分は見逃しているのではないか、という落ち着かない感じを抱いていることは多い。かといって、彼らが何らかの政治的信条に深く関わっているというわけでもない。過去1世紀の間には、政治的な闘争が、それ以前の時代や他の文化において宗教が占めていた地位にとって代わったこともたびたびあった。最近の歴史を省みるなら、政治だけで問題をことごとく解決できる、と今さら信じることはできない。しかし、それ以外の何のために生きることができるだろうか（HWL p.5）。

その答えとして、シンガーは「私たちは倫理的な生き方ができる」と提案している。今まで慣習的に行われてきたような私益の追求は、個人にとっても集団にとっても自滅的であり、倫理的な生き方こそ私益の追求に代わる最も根本的な生き方なのだと主張する。自分がどう生きているかを一定の仕方で反省し、反省して得られた結論に従って行動しようと努めるといった倫理的な生き方を実践することによって、私たちは文化を超えた大いなる伝統に連なるものとなり、そうした生き方が自己犠牲ではなく自己実現であることもわかるとする。さらに、世界が抱える苦しみの実例を挙げて、「自分は何のために生きるべきなのか」という、やりがいのある目標を必要としている人々が参加できるような、差し迫った運動は数多くあることを提示している（HWL p.5-8）。

シンガーにとって、そもそも倫理とは何か。まず、彼が「倫理」をどのように捉えているのかについて探ることにしよう。西洋社会の文脈においては、人間の理性によって普遍的な真理なるものを追求するのが倫理の役割で、人間の理性によって何が正しくて、何が間違っているかを決めていく営みとして発展してきた。伝統的な宗教と倫理の関係において、かつての西洋キリスト教社会においては、正しいことを行った有徳の人間は永遠の至福によって報われ、他の人間は地獄で火あぶりにされるという報いの結果を説いて、人々に正しい行為を実践するように宗教は説いていた。しかし、シンガーは、「我々の日常の人間観察からすれば倫理的態度をとるのに天国と地

獄の信仰が必要なわけではないのは明らかである」として、来世を語るような「物語」はもはや現代人にとっては必要がないとした見解を提示し（PE p.4-5）、造物主・超越者といった外的存在によってあらかじめ規定された意味を付与されずとも、選好する存在として個々に人生の意味を獲得していくことが可能であるとして、現代においては宗教によって倫理が規定される必要はないとしている（PE p.394-395）。「非宗教的な倫理学はまったく初期の段階にある」と述べたパーフィット[4]と同様、西洋社会においては「宗教」によって道徳的な推論の自由な発展が妨げられてきたと見なすシンガーにとって、「倫理」がこれまでの「宗教」に取って代わって、本来的な道徳の基盤を取り戻して再生させるものとして捉えられていることがわかる（HWL p.22-25）。また、特殊文化的文脈を離れて普遍的倫理は存在しないとする相対主義の理論をも否定し、これまで文化的な慣習として捉えられていた倫理的な「善さ」が文化を超えて普遍性をもつのかどうかが再考される必要性を示唆している（PE p.7）。

シンガーの見解によると、倫理が文化的・宗教的な特定の世界観のみに基づくことを否定するが、かといって「倫理がそもそも存在しない」という見方も否定することになる。ここから、シンガーには特定の文化・世界観を超えた「普遍的な真なる倫理が存在する」といった想定があることが理解できる。「倫理規準に従って生きるという観念は生き方を擁護するという観念、生き方のための理由づけをするという観念、ひいては生き方を正当化するという観念と結びついている（PE p.11）」として、自身の生き方の論理的な正当化ができるかが「倫理的な生き方」の第一の条件であることを明かしている。ここに、自分で自分の生き方を論理的に擁護し、正当化しながら生きることが「倫理的な生き方」であるとするシンガーの信条が伺える。ある人が普遍的な倫理規準に従って生きていることが客観的に承認されるには、「私益だけによる正当化はだめで、私益から出た行為が倫理的に擁護できるためには、その行為がもっと広い基礎をもつ倫理的原則と両立することが示されなければならない（PE p.12）」。シンガーが普遍的な倫理規準の命題として掲げるのは、「世界の苦を減らすこと」である[5]。「世界の苦を減らすことによ

る幸福の最大化」という功利主義的立場こそ、「倫理の普遍的様相」の実現に至る第一段階である想定している（PE p.13-17）。さらに、「私たちが倫理的でない生き方を続けて、今日の世界に存在する膨大な量の不必要な苦しみに対して無関心でいることはできない（HWL p.8）」と強調するシンガーの発言に、これまで幅広い領域に関心を寄せて、実践的な取り組みと共に活発的な研究活動を展開してきた、彼の原動力なるものが表現されていることを看取できる。

『私たちはどう生きるべきか』の構成は、現代に支配的となった「私益中心の生き方」の由来を暴き、利己心と遺伝子の関係、人間が本来的に具えた共存性、ジェンダー的視点、西洋とは違う文化の有効性と倫理とを絡めた考察を経て、実際に倫理的に生きている人々や過去に倫理的に生きたとシンガーが見なす人々の実例を紹介して、「倫理的に生きること」の有用性を提示する、といった展開をとっている。「どんぶり勘定」の功利主義としてシンガーの理論展開を非難した土屋貴志は、「功利主義の欠陥をシンガー自身が自覚しているせいか、シンガーは最近では、功利主義を前面に押し出さず、むしろ我々の直感的判断に訴えるような一般向けの啓蒙書を書いている」と指摘している[6]。果たして本当に、シンガーは、功利主義のプロジェクトを諦めてしまったのだろうか。

確かに、本書の特徴として、シンガーが人々に徹底して「倫理的に生きる」よう呼びかけており、『実践の倫理』で見られたような、選好功利主義が普遍的な倫理的基盤の構築に有効であることを主張した箇所はほとんど見られない。しかし、本書に全体的に流れる「倫理的な生き方のすすめ」自体が、シンガーの功利主義の戦略とも捉えることができる。近代の歴史のなかで、ベンサムやミルをはじめとした初期の功利主義者たちは政治に対して多くの提言をし、経済学においても功利主義の「効用」概念が採り入れられるなど、社会形成に大きな影響をもたらしてきた。現代において、政治が宗教の代わりを占めていた時代も終ったと見なすシンガーは、「もし人口の１割の人々が、生き方について意識的に倫理的な見方をし、それに従って行動するならば、その結果として生ずる変化は政府がもたらす変化よりももっと重

要なものであろう」と予測し、「私たちは物質主義的な私益追求に代わる現実的で実行可能な代替策として、倫理的な生き方を復権させなければならない」と主張する（HWL p.357）。「世界の苦しみに立ち向かう」という個人の自発的な選好に基づく「倫理的な生き方」こそ真の生き方であると提示して、（政府や団体組織よりも）個人に訴えること自体が、シンガーの「苦しみの軽減プロジェクト」の戦略なのかもしれない。

3．宇宙の視点

世界が抱えている問題を解決するためには、家族や親族、その他の互酬的な人間関係といった関係性を越えるより広い視野が必要であるとシンガーは強調する（HWL 第 9-11 章）。

人類は目的追求的な存在としての本性をもつと捉えるシンガーにとって、人は「自分自身の快楽を越えたところに自分の人生の意味を求め、自分が意味を認めたことをなす時に満足と幸福を感じる」。一方、「精神病質者の人生は内側へと向かい、現在この瞬間の快楽だけを見ていて、もっと長期的に、あるいはもっと広く外に目を向けて見ないがために無意味である」のに対して、「正常な人の人生は何かもっと大きな目的をもって生きているために意味がある」とする。自分の人生に一貫した意味を見いだすためには、「精神病質者のレベルを超えるだけでは十分ではなく、富や名声といった自分の利益だけに関わる長期的な計画を抱いている思慮ある利己主義者のレベルをも越えていかなければならない」と主張している（PE p.395-397）。ここでは、理性をもつ人格か否かが、その存在が生きる意味を有するか否かの決め手となる。たとえ理性的存在者であっても、現在この瞬間だけの快楽を重視して長期的な利益に関して考慮しない私益中心の生き方をしているのでは意味が少ないのであり、倫理的な生き方を採用して人生に意味を見いだしている人と比較すれば、存在としての価値は低い。精神病質者の例まで持ち出して、「人生の意味」を述べていることから推測すると、おそらく、理性的存在者の間、すなわち私益中心の生き方をしている人と倫理的な生き方をして

いる人との間にも価値の優劣があることをシンガーは示したかったのであろう。さらに、「自分自身の意識状態という狭い制約を越えた意味を人生に感じさせてくれるものを求めているのなら、倫理的な観点を採用することである」とも述べて、「倫理的な観点は、個人的な観点を越えて公平な観察者の立場に向かうよう求めてくる」ことから、「倫理的にものごとを見るということは、我々が自分の内側に向かう関心を超越し、可能な限り客観的な観点に自分を同化させる――シジウィックにならって言えば、「宇宙の観点」に同化させる――一つの方法」なのだと断言している（PE p.397）。

実際に、動物保護運動や国際援助運動等の実践にコミットしている、「地球を苦しめている悲惨の多くの原因を減らすために努力している」人々が、「自分のしている活動に達成感を見いだすことができており、それは正当なことである」として（HWL p.338）、これらの人々の倫理的な生き方の特徴として、「宇宙の視点」に立っていることを挙げている。ただし、この「宇宙の視点」とは、最大限にすべてを包接する視点であり、「宇宙そのもの、あるいは宇宙の内の感覚ある存在ではない部分が何らかの意識をもつとかいった態度をとるとは見なさない」としており、汎神論の立場や宇宙それ自身が超越者としての視点をもつ、あるいは感覚ある存在の外部に意識があるといった立場は否定する（HWL p.336）。しかし、個人の自発的な「倫理的な観点」の採用によって、万人が「宇宙の視点」のような本来的に普遍的な視野に到達することができるとシンガーが信じているところに独自の死生観が垣間見える。痛みや快楽を感じる能力がある限り、「この視野からながめるならば、私たち自身の苦しみや快楽が他の存在の苦しみや快楽と非常に似ていることがわかるし、その存在が単に“他のもの”であるという理由だけで、それの痛みにさほど配慮しないというのが、まったく不当であるということも理解できる」ともシンガーは述べている（HWL p.336-337）。つまり、客観的な広い視野をもつことによって「感覚」を有する存在としての類似性が理解できれば、他の存在の痛みや苦しみへの配慮は万人にとって当然のことであり、感覚能力と他者の状況が把握できる理解力があれば、他者の「苦」に共感し配慮することがあたり前の行為であるとしている。「宇宙の視

点」をとる人々は、「退屈することはないし、自分の人生を意味あるものにするために精神療法を必要とすることもな」く（HWL p.337）、「自分の人生に意味を見いだすという難題を克服することができる」としている（HWL p.350）。また、「宇宙には避けることのできる苦痛や苦しみがかくも多く存在するというまさにその理由で、私たちが自分の達成感を味わえるということは、悲劇的なアイロニーであるが、それが世界の現実なのである」とも述べている（HWL p.337）。シンガーが言わんとすることは、自分の人生に意味を見いだすために、悩んで自己の内側に意味を見いだすような内観的な療法を頼らずとも、世界に存在する「苦しみ」に目を向けて、個々人が「自分が救うことのできる苦しみ」を見つけて実践することによって、自分の存在が必要とされていることが理解でき、達成感が味わえる、ということである。シンガーがしきりに読者に促しているのは、「まず世界に存在する“苦しみ”に目を向けよ」という実践の指令であることが読み取れる。

ただし、実践がもたらす結果の予測不可能性はシンガーも認めている[7]。「倫理的に生きるとは、自分が誤りを犯すという可能性を認めつつ、直接的で実際的な仕方で、世界をよりよい場所にするために自分にできることをするということである（HWL p.341）」と述べているように、実践する道の正邪をあらかじめ把握することができないのであるから、当人が信念をもって自分にできることに取り組んでいくしかないことになる。しかし、実践の努力が無駄にならないことをシンガーは次のように説明している。

> 時間を第四の次元と見なすならば、感覚ある生命が存在する期間全体を通じての宇宙を四次元の世界と考えることができる。ある特定のところ、ある特定の時に私たちの努力によって意味のない苦しみを減らすなら、それによって私たちはこの四次元の世界をよりよい場所にすることができる。そのさいに、他のところや他の時に苦しみを増やしたりせず、また苦しみを減らす一方で同程度の不利益を生み出すというようなことをしないなら、私たちは宇宙に対してプラスの影響を与えたことになる。（HWL p.351）

つまり、一存在として苦しみを減らすという実践の努力をし、普遍的な永遠性をもつ宇宙に対して、プラスの影響を与え、宇宙史に行為を刻むことに意味があると見なすよう呼びかけているのである。一方、このシンガーの世界観からも、感覚ある生命のみが世界を知覚しえるということをもって、宇宙の存在対象とシンガーが見なしていることも読み取れる。

4. 理性のエスカレーター

「宇宙の視点」をもつに至る作用が、シンガーいわく「理性のエスカレーター」である。

これまでに提唱してきた「実践の倫理」[8]を俯瞰すると、シンガーが理論を組み立てる際の戦略には、「種差別による人間中心の利益重視」を拒否して「動物も含めた総体的な苦痛の軽減」を重んじるものの、それよりも「理性的能力のある存在の選好」を優先するといったシンガー独自の倫理的配慮に関する価値観の序列が組み込まれていることが指摘できる。シンガーにとって、人々がこれまでの自己の生き方を反省し、倫理的な生き方を採用するように働きかける原動力になるのが「理性」であり、先述したように「理性的存在」の「倫理的な生き方」が、最高善の価値としてシンガーのなかで把握されているということである。理性による思考の上昇をエスカレーターにたとえて、「理性の能力をもっていると、私たちは最初到達したいとはまったく望んでいなかった結論へと導かれることがある（HWL p.343)」、「理性のおかげで、私は、他人も同様に主観的な見方をもっていること、そして「宇宙の視点」という普遍的な見地からは私の見方、他人の見方のいずれもが特権的な位置にはないことを知ることができる（HWL p.349)」とも述べている。[9]このような見解の通底には、「だれをも1人として数え、1人以上に数えてはならない」としたベンサムの主張も看取することができる。シンガーが理性の可能性にここまで期待しているのは、「理性能力によって、私たちは、恣意的な主観的立場から脱することができるし、自分の属する社会の価値を何の批判もなく受け入れるという態度に陥ることを免れることもできる

だろう（HWL p.347）」とシンガーが信じているからである。また、「私たちが宇宙の視点をとる時に得られる自分に対する見方はかなり客観的なものである。この客観性は、自分自身の欲求を離れて価値のある主張を見つけようとするには十分なものである」ともシンガーは言うが、個人の理性的推論による「宇宙の視点」が真の客観性をもちうるのかどうかは疑わしいと言わざるを得ない。

シンガーは、価値が当人の主観的な欲求により完全に決定されるという見方に反発し、伝統的な意味での人間に外在する倫理の客観性という見方も擁護しない。倫理的真理は宇宙の組織の中に書き込まれているわけではないとする。「何らかの種類の欲求あるいは選好をもった存在がいないとすれば、価値あるものは何も存在せず倫理には内容がまったくないことになる。他方、欲求をもった存在がいるなら、個々の存在の主観的価値にはとどまらないような価値が存在する（HWL p.352）」との発言から、シンガーには、選好をもった感覚的生命が存在する以上、価値の序列を認めるような倫理的秩序があるとの想定があることが伺え、人々が理性のエスカレーターを通じて、個人が現在立っている地点を見直し、倫理的な生き方を採用できるようになれば、社会を変革できるようになるといった構想があるのではないかと推測できる。

シンガーの「理性のエスカレーター」の発想をまとめると、倫理的な生き方をするには、他者や世界におけるあらゆる苦悩に目を向けることから、我が身の理性に「自分には何ができるか」と働きかけることからの出発し、実践のなかで感化されつつ、理性的反省を心掛ける素養が身につくように努めるうちに、理性のエスカレーターの作用で、「私たちが自分の本性を監視し、より広い見方のあることを意識するように（HWL p.354）」なれるといった構想である。しかし、そうした生き方を持続させるには、常日頃から「倫理的反省や普遍的思考を心掛けるように」と我が身に言い聞かせることが要求され、強靭な自己信念が必要とされるように思われる。シンガー自身も、「このより高い倫理的意識が誰にも共有されるようになるだろうと期待することはできない」とは認めている（HWL p.356）。結局、倫理的な生き方を

採用することによる帰結は、実践者の変容とその影響として把握するしかないことになる。

ここで、倫理的な生き方の提唱の仕方、「宇宙の視点」や「理性のエスカレーター」の構想を、シンガーの「世界の苦を減らすこと」をめざすプロジェクトの文脈のなかで捉えてみると、次のようなことが推察できる。シンガーにとっては、たとえ理性的存在者であっても、私益中心の生き方をしている人は、自己の人生に意味を見いだせる倫理的な生き方を採用している人と比較すれば、「不幸である」といえ、人生に意味や満足感を得られていないという点で「苦しむ」存在である。「苦しみ」の現場とは、シンガーが「苦しみを軽減する」実践としてすすめている活動（肉食にする動物の飼育方法や実験動物にたいする不当な扱い、絶対的貧困、森林の伐採などに反対する運動）の対象になるような可視的に外在する苦しみの状況とは限らない。直接的な記述にはないが、おそらく彼は、「自分は何のために生きるべきなのか」というやりがいのある目標を必要としている人々も、人生に意味が得られていないという観点から、「苦しみ」を抱える存在として見なしているのではないだろうか。

シンガーが個人に「倫理的な生き方」を採用するように熱心に呼びかける目的とは、実践を行う個人にとっての実践の対象となる、いわば当人に外在する「苦しみ」を軽減することだけではなく、実践者自身の「人生に意味を見いだしえていない苦しみ」をも実践によって軽減することができるといった点にもあるのではないかと思われる。個人に「実践に取り組む」よう呼びかけるといった戦略は、功利主義者にとってはまさに一石二鳥の「効用」をもたらす、「苦しみの軽減による幸福の最大化」を推進する戦略なのである。「人生に意味を見いだすこと」を到達点に据えて、まず世界に存在する「苦しみ」に目を向けて日常的に反省的思考を活用させるよう促し、当人が取り組むべき課題を自身に課すことを習慣化するよう「実践」に取り組ませることが、現代の「救済財」としての役割を担おうとしている、超越者をもはや必要と考えないシンガーの「倫理」の実践的方法論であるとも捉えることができる。ここに、シンガーを「倫理の布教使」として捉えることも可能であ

る。シンガーが推奨する「倫理的な生き方」とは、「生きていることに意味を見いだす」ことを到達目標に掲げた実践行であるともいえるのである。

5. 理性と感情の関係性

シンガーは各個人が、世界の苦しみに目を向けた上で、自身に理性による反省的思考を課すことによって、各々の選好に応じて実践へと向かうことを目的として呼びかけていた。しかも、単に読者の理性的推論に任せるのではなく、実際に「実践」することによって当人が何かを会得することをすすめるその呼びかけには、個々人が現実の苦しみに目を向けたことによって感じとる何かが実践の契機となり、さらにはその実践の体験がもたらす心の変容に期待を寄せるシンガーの意図が伺える。シンガーは通常、非感情的な理性主義者で通っている。「理性に訴えるほうがより普遍的で、有無を言わさぬものだからである。私は同情と思いやりに期待するだけで、スピシーシズム（種差別）の誤りについて多くの人を説得できるとは思わない（AL p.306）」という発言や、新生児の生命について考察する際には、「我々は外見上小さくて、無力で、可愛いということに起因する感情をわきにおいておかなければならない（PE p.205）」との発言に見られるように、感情は倫理的な決断を行う場合の根拠とはならないというのが彼の信念である。

哲学者のロバート・ソロモンは、理性重視のシンガーの姿勢には「合理的として理性を捉える恐ろしさ」が伺えるとして、彼の「倫理理論が感情的要素を考慮しないようにして展開されるそのこと自身が、結局は感情拒否を主張するよりもさらに強い感情的要素に支配されているのかもしれない」と批判している[10]。加えて、シンガーが著作において、感覚的生命が苦しんでいる悲惨な現状、あるいは現実における不合理性を列記し、「このまま何もせずにいてよいのか？」という態度で迫る呼びかけの対象とは、実際には読者の「感情（感受性）」なのではないかといった疑問が生じる。しかし、シンガーは「世界の苦しみを軽減する」ことを最大の目的として掲げ、苦痛は無条件に「悪」であるとしながらも、「苦しみ」とはいったい何で、自他の「苦し

み」をどう知覚するのか、他者の「苦」に共感できるような「感受性」の鍛え方・磨き方については何も語っていないのである。

他者に言葉で伝達するには、伝えたいことを対象化し、客観化して、さらに言語化しなければならない。自分の体験によって自分と世界との関係それ自体が変容してしまったというリアリティを伝達するためには、自分が変容したそのやり方を他人に追体験してもらうしかない。シンガーがしきりに実践を呼びかける理由はここにあると考えられる。どこに「苦しみ」を見いだし、いかに自分を活かせる「実践」を発見できるかについては、本人の選好による。個人の性向や何を苦しみとして捉えるかといった感受性は人様々である。感情に対して人は基本的に受動的であるしかない。一方、対象との関係のなかで、当人が何かを感じ、自身が感じたことの価値や意味を考えた上で納得した決断ができなければ、日常生活に根本的な変化をもたらすような倫理的な生き方への実践には踏み切れないことは確かであろう。シンガーが強調していた「理性のエスカレーター」作用とは、実際には、感情（感受性）と理性との連動なくしてはありえないのではないかと思われる。シンガーにとって、苦の感受性とは正義の感覚として理性的思考の中に組み込まれているものとして捉えられている、もしくは、感情を議論に持ち出すことへの倫理学者としての「禁欲」があるのかもしれない。

シンガーがあらゆる幅広い分野に関心を向けているのは、「世界における苦しみの軽減」を目的としているからだということはすでに指摘した。広井良典によれば、相手に「時間をあげる」こと、あるいは、時間をともに過ごすということ自体が一つのケアである。「ケア」とは「自分以外の何ものか」に向けられたものであるのに、その過程を通じて、むしろ自分自身が力を与えられたり、ある充足感、統合感が与えられたりするものだともいう。[11] 他者の苦しみの軽減に配慮するとは、まさに「ケア」であり、シンガーが他者の苦しみを減らすために実践活動に取り組む「倫理的な生き方」とは、実は「ケアする生き方」でもあることが指摘できる。自分以外のものに配慮をもたらすことによって、自分自身も励まされたり、達成感や意味あるものを見いだせるとする過程は、シンガーのすすめる「倫理的な生き方」の過程と一

致するものである。「ケア」をある一定期間に対象に配慮する行為であると捉えるならば、「倫理的な生き方」とは「ケア」を積み重ねて生きる生き方であるともいえる。これは、自己犠牲の積み重ねではなく、常に他者との関わり合いのなかで、自分がいかに行動すべきかに配慮し、そこで自分が存在することの意味を見いだしていく生き方である。そうして日常においての他者配慮＝「ケア」を積み重ねていくなかで、他者との関係性のなかでの自分の位置を客観的に見つめ、状況を把握した上での自分のなすべき判断を選好する作用に理性能力が必要とされるのではないかと考えられる。

従来、人間は「思考する動物」であるという観点から、思考や認識、記憶などを扱う大脳皮質とりわけ前頭葉の部分が、「人間固有」のものとして重視されてきた。しかし、近年になってむしろその重要性が認識されてきているのが、「知」を規定する「情動」を司る「大脳辺縁系」の部分である[12]。広井は、「情動」を他者あるいは事物との関係において発生する「ケアに関わる感覚」として捉え、「内省」をこれまでの経験に遡って、他者・事物と自分との関係性を分析していく作業であるとしている[13]。シンガーの文脈に置き換えてみると、情動とは実践の関係性のなかで発生する感情であり、内省とは理性の作業として捉えることができる。シンガーの提唱する「苦しみの軽減」策においては、目を向けた「苦しみ」の対象との関係性のなかで自身に沸き起こる感情を、理性によって、より倫理的な観点をとる方向に導くことができるかに加えて、「ケアに関わる感覚」をいかに鍛えるかが重要な課題になってくるのではないかと思われる。何故なら「情動」を鍛えなければ、他者の「苦しみ」を感じることができないからである。「思考する動物」としての、状況を把握し思考するといった理性能力とともに、「ケアする動物」としての、他者の気持ちを汲み取り、気遣い・配慮する能力の相互作用によってはじめて「苦しみの軽減」の実践が存立するといえるのではないだろうか。ギリガンの研究[14]以降、正義の倫理とケアの倫理は対立軸にあると見なされがちであった。しかし、シンガーの提唱する「倫理的な生き方」と、ケアする生き方の類似性を見る限りでは、普遍的な善さを抽出して表現する言語化の違いによるのかもしれず、倫理間の対立は、実は誤解による対立であ

る側面も往々にしてあるのではないかと思われる。

「実践哲学の復権」を唱えつつ、自らも医療倫理や家族問題、教育制度改革といった現実問題に携わってきた「実践」の科学哲学者と言われるスティーヴン・トゥールミンは、ルネサンス期の「実践的」哲学がなぜ近代の「理論中心的」哲学へ「転換」したのかについて論じるなかで、デカルトに始まる、合理性・論理性・形式性という特徴を有した哲学の「理論中心」のスタイル――問題を提出し、解決を求め、超時間的、普遍的な観点から述べる――が1650年代以降の「近代」哲学のアジェンダを定めたと分析している。デューイやハイデガーらの破壊的作業の後では、哲学にはもはや限られた選択しか残されていないとして、その一つに、新しいさほど理論一辺倒ではない仕事の仕方を探し、より実践的なアジェンダに必要な方法を開発することを挙げている[15]。シンガーが実践の哲学を提示する仕方は、まさにこのタイプに属するといえるが、感情を隠蔽した理性一辺倒のスタイルは、トゥールミンが指摘する「近代」哲学のアジェンダそのものも踏襲しているといえる。

6. 苦しみの意味と救済

ここで、シンガーが「苦しみ」をどう捉えているのかについても触れておく必要がある。彼の対象としている「苦しみ」は、現在という時間に定位しての「予防的な苦しみの軽減策」とでもいうべき価値判断であることが多いと指摘できる。実際に、これまでのシンガーの主張が、現実の改革を促進した面は確かにある。『動物の解放』の発刊以降、動物解放運動が巻き起こったことは事実であり、運動の結果、ドレーズテストやLD50のような動物虐待にあたるような実験は減少し、毛皮取引は激減し、幾つかの国で閉鎖的な形での畜産工場のあり方が改められ、菜食主義も普及するようになった（PE p.83、RLD p.218）。

しかし、シンガーが主に『実践の倫理』において提示してきた、畜産工場における食肉用の動物を減らす提案や人口抑制政策、あるいは安楽死の法制

化や選択的中絶の擁護、さらには障害新生児にたいする「死ぬための措置」の提案についての議論と、シンガーの根底にある「苦しみを減少させる」という功利主義的命題とを考慮するならば、「世界全体の苦しみの量を不必要に増加させるような、人間を含めたあらゆる感覚的生命を新たに生み出すべきではない」という主張に容易に転換することを看取でき、それは世界から異質性を排除することを指向するのではないかということも指摘しておかなければならない。

また、現時点に定位した「苦しみの除去」という価値観のみが善であるとして社会に浸透することの問題とは何かというと、当事者やその関係者自身が現在味わっている「苦」と向き合って「苦しみを受けとめる」あるいは「苦しみの現実のみではなく真相を見つめる」ことから人々が目を逸らしてしまいかねないということである。これは、他律的な物資・金銭援助がその場だけのものにとどまり、自律的な地域性をもった発展になかなかつながらないという国際援助の場面でよく見られる傾向にも当てはまる。いかなることにも、現在のような状況になった原因たる要素があるはずである。例えば、絶対的貧困の状況においては、植民地支配による影響も大きいとしても、その地域の社会体制や人々自身の要素も関係しているはずである。

人は「どうしてこのような苦しみを味わうのだろうか」ということを反省する視点に立ってはじめて、自分の世界における位置を把握でき、「自覚」に基づいて立ち上がることもできる。他者が「取り除き」や「与え」といった援助を行ってばかりでは、他律的に依存したり、責任を転嫁する一方で、援助する側・される側の格差が一向に縮まらない。新たな支配－被支配構造を生み出すことにもなりかねない。シンガーによる「援助活動」の視点は主に金銭援助に絞られていることがわかる（PE 第 8 章）。「何を苦しみと感じるか」といった人々の感情（感受性）や性向も考慮に入れた、「何をもって苦しみとするのか」、「現状の苦を生み出すに至った利害関係者の行為と因果関係はどうだったのか」といった「苦しみ」にまつわる要素の解明に取り組んで始めて、「苦しみ」を減らすという結果につながるのではないだろうか。

ヴェーバーによれば、宗教の提供する救済財は、救いを求める人々にとっ

ての此岸における感情的な心的状態にほかならなかったという。つまり、現実の生における意味を求める人々の感情的な心にとって、宗教は、「意味」を与えるといった救いを提供してきたということである。さらに、「人間の行為を直接に支配するものは、利害関心である」とも指摘する。その利害関心とは、人々が「何から」そして「何へ」と「救われる」ことを欲するという人間の心情的な習性で、その背後には常に現実の世界に意味を希求する要求が秘められていると分析している。「全面的合理化という近代の形態は、世界像の知的な形成という観点から見て宗教を非合理的なもののなかに押しこめてゆき、知性主義的な合理主義の進展とともに、必然的に、個々人は自らの救済をただ個々人としてのみ求めうることになる」とも述べている[16]。現代はまさに個人として救済を求める時代であるといえるが、現代人にも通じる人類共通の要素の一つとして、人間は生きていく上で心情的に「意味」を求めずにはいられないという習性が挙げられる。パーソンズは、共同体における世俗化された「愛の連帯」が可能かを考察するなかで、個人としての相互の連帯的結合における、「感情」のメディア（媒体）としての作用に期待する議論を展開し、社会の存続・連帯における「感情」による媒介の重要性を述べている[17]。人間にとって「意味」とは、理解するものとしてだけではなく、「感じる」ものであり、「意味を感じる」上で、重要な役割を果たすのが「感情」であるともいえる。シンガーは、「宇宙の視点」に至るに「理性のエスカレーター」の作用が必要であると説いていたが、理性が段階的な思考を進めるには、頭脳による理解のみではなく、「意味を見いだし、感じ、納得する」ことを希求する感情的な要素による媒介がやはり不可欠なのである。

倫理学者の森岡正博は、現代においては二つのニヒリズムが存在するとしている。二つとも、「世の中の宗教や道徳が説くような価値にはまったく根拠がないと考える」点では共通しているが、そこから、一方は、怠惰と快楽主義に陥る方向性をもつに至り、もう一方は、「だから、我々ひとりひとりは、自分の人生の生き方に関して真に自由だ」と考え、「自分の生き方を自分自身でゼロから作り上げていかなければならない」として、人生に対してむしろ積極的になる方向性をもつに至ると述べている[18]。シンガーはまさに、

後者のタイプに当てはまるといえるであろう。シンガーが提唱する「倫理的な生き方」とは、現実の状況に対して反省的思考を働かせることによって、自分の現在の位置やあり方を見直し、現実に世界に存在する「苦しみ」に目を向け、その軽減に取り組む「実践」を行いながら理性的推論によって常に自己に「自分は今何をなすべきか」を問うていくといった、実践と反省的思考とのくり返しのなかで、やがて自分で自分の生き方に納得する・満足できるような「意味」を獲得できるとする生き方である。「苦しみの軽減」に取り組む「実践」の積み重ねによって「人生の意味」を獲得するに至るという一連のプロセスの提示は、「個々人が自らの救済をただ個々人としてのみ求める」現代という時代にある種適合した、本性的に「意味を希求する」人間にたいしての救済財の提示と捉えられるのではないだろうか。伝統的に「宗教」が提供してきたのは、特定の世界観を信じることに基づく「生きることの意味」であったのに対して、シンガーに見られたような、「倫理」が提供する救済とは、あくまでも当事者自身が「意味を見いだす」ように働きかける動機づけの提示といえるのかもしれない。しかし、シンガーが「宇宙の視点」という超越性を持ち出して語っていたように、宗教にせよ倫理にせよ、「善い生き方」を貫くように促す際には、実践的な行為の遂行に対する報いともいうべき帰結を提示する必要があるのかもしれない。

宗教学者の澤井義次は、「科学史や比較文化、医療社会学から指摘されているバイオエシックスの方法論に関する再検討という近年の研究動向は、現代の宗教学における宗教概念の再検討という研究動向とある意味パラレルをなしている」と述べている[19]。日本においては未だ、「超越性」を捉える次元としての「宗教」と「倫理」の位置があいまいであると言わざるをえない。現代的な死生観を表す領域としての生命倫理を考察していく際に、実践的な倫理問題に積極的に提言する者の根底にある、個人の発想・根本的な価値観・死生観がどこまで文化あるいは宗教・哲学思想に由来するのかを探り、様々に比較考量していくとともに、種々の倫理的提言に共通するもの、希求される普遍性とは何かを探究していくことが課題となる。分岐した諸学が再び集まる学問としての死生学の場において、様々な研究者によってその試み

がなされていくことが、今後も期待されているといえるだろう。

■註

1　本論文において、「応用倫理学」という場合は、生命倫理（医療倫理）・環境倫理など、倫理学の原理と方法を活用しつつ、現代社会が投げかける重要かつ緊急な倫理問題に応答しようとする実践的な倫理を扱う分野を包括する名称として用いることにする。

2　Dale Jamieson (ed.), *Singer and his critics*, Blackwell Publishers, 1999. および、ヘルガ・クーゼ「序　ピーター・シンガーの実践倫理」、ピーター・シンガー『人名の脱神聖化』浅井篤／村上弥生／山内友三郎監訳、晃洋書房、2007 年所収。Gordon Preece (ed.), *Rethinking Peter Singer: A Christian Critique*, InterVarsity Press, 2002. によれば、アメリカやオーストラリアの一般の若者たちの間では「倫理の提唱者」として人気があり、アカデミズム界においては「間引きの提唱者」だと非難されてきた。

3　本著は、その構想からして、R.N. ベラーらによって書かれた『心の習慣』（原著 R.N.Bellah(ed.) "*Habits of the Heart*", University of California Press, 1985）にかなり影響を受けていることがわかる。ベラーも「はじめに」の冒頭にて、「私たちはいかに生きるべきか？」と読者に投げかけ、アメリカ国民との間で交わした研究の根本的な問いが、「どうしたら道徳的に筋の通った（coherent）人生を保持あるいは創造することが可能か」を追求することであったと表明している。シンガーは、本著において、ベラーが紹介した事例や分析を多く採用し、「倫理的に満足して生きる」とはいかなることかを考察している。

4　D.Parfit, *Reasons and Persons*, Clarendon Press, Oxford, 1984.（邦訳『理由と人格：非人格性の倫理へ』森村進訳、1998 年）パーフィットは、「神ないし多数の神々への信仰によって、道徳的な推論の自由な発展は妨げられた。神を信じないことは、大多数の人々によって公然と認められたものの、ごく最近の出来事であり、まだ完全に広まったわけではない。これは本当に最近の出来事なので、非宗教的な倫理学はまったく初期の段階にある」と述べて、倫理学の研究はごく最近まで主として宗教の枠組みのなかで行われてきたと主張する。パーフィットは、非宗教的な人（ここで言う宗教的とは、超越者を立てる信仰が「宗教」であるとした見解である）で倫理学を生涯の仕事とした人は驚くほど少ないとして、ブッダ、孔子、ヒューム、功利主義哲学者のシジウィックを挙げて、多くの道徳哲学者が無神論者になったのは 20 世紀になってから、

しかも非宗教的な倫理学を体系的に研究し始めたのは 1960 年以降にすぎないとしている。

5 「私の倫理的な立場は功利主義であり、苦しみをなくそうという命題はこの立場に由来する（DL p.18）」と述べている。シンガーの功利主義的立場の詳述は、拙稿「哲学者のバイオエシックスへの参入」東京大学宗教学研究室『東京大学宗教学年報 XXV』2008 年参照。

6 土屋貴志「生命の「置き換え可能性」について―― P. シンガーの諸論を中心に――」『人文研究』大阪市立大学文学部紀要、47-1：pp.81-82

7 倫理的関心の拡大が悲劇的な結果になった例として、初期のマルクス主義者たちの倫理的に献身的な態度が陥ったスターリニズムの悪夢を挙げ、倫理的原則の名のもとに狂信主義と権威主義が横行することの害悪を語っている。（HWL p.340-341）

8 動物解放、貧困問題、中絶、障害をもつ胎児・新生児を殺すこと、安楽死の法制化、環境問題に関するシンガーの提言に通底する倫理判断・存在を序列化する志向性については、拙稿「哲学者のバイオエシックスへの参入」参照。

9 ただし、倫理的視点の根拠として宇宙の視点をとるということは、人が常に公平無私な態度で行動すべきということを意味しているのではなく、親子間など親密な関係性の間の優先性は正当化できるとする。また、次のような主要な倫理的伝統はすべて、利益の平等な配慮をすすめる一種の黄金律にあたるものであり、宇宙の視点をとるという考え方と軸を一にしており、その類似性には驚くべきものがあるとしている。「あなた自身を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」と言ったイエスの発言。「あなたにとっていやなことは、あなたの隣人にはしてはいけない」というラビのヒレルの発言。「己の欲せざるところ、人に施すことなかれ」といった孔子の教え。「いかなる人も、自分がきらうことを他人にしてはならない」という『マハーバーラタ』にある記述。（HWL p.350）

10 Robert C. Solomon, 'Peter Singer's Expanding Circle: Compassion and the Liberation of Ethics', *Singer and his critics*, p.79

11 広井良典『ケアを問いなおす』筑摩書房、1997 年、p.8-10, 14

12 松本元『愛は脳を活性化する』（岩波書店、1996 年）によれば、以前は脳への感覚入力はすべて大脳皮質で処理されてから大脳辺縁系に送られると考えられていたが、最近では「情動判断のほうが知を含めた脳の活性を制御する」ことがわかってきたとしている。

13 広井良典『ケアを問いなおす』p.24-28

14 Carol Gilligan, *In a Different Voice : Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press, 1982.

15 スティーヴン・トゥールミン『近代とは何か　その隠されたアジェンダ』藤井龍雄・新井浩子訳、法政大学出版局、2001 年、p.15-17

16 マックス・ヴェーバー『宗教社会学論選』大塚久雄／生松敬三訳、みすず書房、1972 年、p.40-61.

17 タルコット・パーソンズ『宗教の社会学』富永健一／徳安彰他訳、勁草書房、2002 年、p.273-276.　パーソンズは、感情は、一般行為レベルのメディアであるが、社会システムと個人のパーソナリティシステムと文化システムを媒介するものとして機能し得る。社会システムレベルにおける大規模な共同体の存続能力や安定性にとって、感情以外にその必要な役割は果たせないとしている。

18 森岡正博／養老孟司『対論　脳と生命』筑摩書房、p.160

19 澤井義次「新たな生命倫理への宗教学的視座」『宗教研究』第 349 号、日本宗教学会、2006 年、p.31

■引用文献の略語対応表

ピーター・シンガー『現実的な左翼に進化する』竹内久美子訳、新潮社、2003 年（DL）

ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』山内友三郎／塚崎智監訳、昭和堂、1999 年（PE）

ピーター・シンガー『生と死の倫理』樫則章訳、昭和堂、1998 年（RLD）

ピーター・シンガー『動物の解放』戸田清訳、技術と人間、1988 年（AL）

ピーター・シンガー『私たちはどう生きるべきか〔改訳版〕』山内友三郎監訳、法律文化社、1999 年（HWL）

（やまもと・えみこ　東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）

Peter Singer's Worldview and its Relationship to his Concept of Ethical Life

Emiko Yamamoto

This article examines Peter Singer's way of thinking about the concept of Ethical Life. Peter Singer is one of the leading members of the practical ethics movement, and one of the most famous and influential philosophers alive. In his work, he not only deals with philosophical and ethical questions, which are his area of specialization, but also with politics, economics, medical care, environment, international aid and sociobiology. He addresses these issues from within a philosophical framework he developed based on a certain strand of utilitarianism. Following this approach, he has devoted himself to formulate practical and philosophical solutions to a variety of contemporary problems. He has also served as the first president of the Institute of International Bioethics, the chair of the Great Ape Project and has been active as a functionary of an animal rights organization.

In Japan, Singer's theories have mainly received attention in the context of animal liberation, vegetarianism, the study of personhood, and utilitarianism. But, as Singer's theories are therefore approached separately from the point of view of each of these issues, it has not become apparent why he has been engaged in thinking about universal ethics. By considering his writings, especially from paying attention to "*How are we to live? : Ethics in an age of self-interest*", we can discern that his fundamental aim has been the elimination of suffering in the world.

The primary purpose of this article is to provide a discussion of Peter Singer's worldview and his underlying motivation for advocating Ethical Life.